

# データセンター のまとめ年表

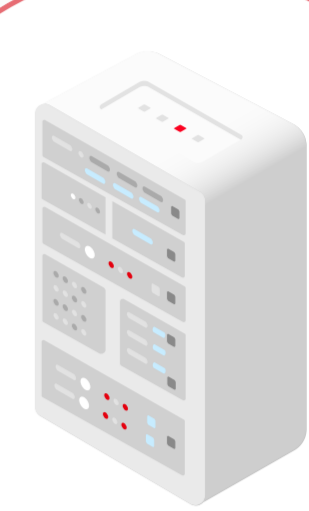
1940s

データは新時代の石油だと言われるほどである。現代のデータセンターは、革新的な物理・ソフトウェア技術の拠点となっている。「今までのデータセンターはどんな感じがする？ 将来はどのように変わっていく？」と、本記事では、日本をはじめとして、データセンターの今までの変遷と今後の動向を話そう。

## 日本での変遷と今後動向

1940s

ENIAC、大砲の弾道計算を目的として開発された世界初の大型コンピューターであった。約1万8800本の真空管を使い、消費電力150キロワット、重さ30トンに及ぶ巨大な機械。



1950s

日本初のデータセンターは、1885年に創始した逓信省が管轄する電話交換局だと言われている。1952年に電話事業は日本電信電話公社（NTTの前身）に受け継がれた。当時の電話が電話交換機を経由して通信できるため、地震などの災害の影響を受けないために、電話交換局は多数の設備を強固な建物に設置されるようになった。

1960s

1960年代以降、大手企業は大型汎用コンピューターで情報システムの導入により、事業者はデータセンターの前身とされている電算センターを建てるようになった。

初期のデータセンターは信じられないほど複雑で原始的なものであった。なぜなら、冷却用の巨大な通気口とファン、すべてのコンポーネントを接続する数百フィートの配線と真空管などの十分な耐荷重の機器が配置されたためだ。

1970s

1971年、日本のビジコンと米国のインテルは世界初の商用マイクロプロセッサとした4004（よんまるまるよんと読まれることが多い）を共同開発された。

1980s

### パーソナルコンピュータの登場

パソコンの登場により、情報技術は空前のブームとなった1980年代、電話交換局はコンピューターを置くようになった。デジタル交換機とも呼ばれるそれらのコンピューターはISDN網（サービス総合デジタル網）の構築の主力交換機として、現在でも利用されている。

2000s

1990年代になると、インターネット接続サービスの普及、インターネットエクスチェンジ（IX）の形成により、現代のデータセンターの基礎が築かれたインターネットデータセンターが登場した。

2010s

データセンターは、マネージド、クラウド、コロケーション、ハイパースケール、エッジデータセンターなど、さまざまな選択肢を提供する現代社会でより安定したものとなっている。

2021~2025

日本国内データセンターサービス市場予測  
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、データセンターの能力が試されている。在宅勤務が大幅に増加し、データセンターやクラウドを通じてビジネスアプリケーションにアクセスする必要性が高まっている。IDCの調査によると、2020年～2025年の年間平均成長率は12.5%になると、2025年のデータセンターの国内市場規模は2兆7,987億円と予測されている。